

一般部門

母を呼び戻した 看護の力

いわむら けいなん

【岩村 圭南・東京都】



優秀賞

あまりにも突然の出来事だった。風邪をこじらせ肺炎が重症化し、母が救急車で病院に運び込まれたのである。しばらくしてICUから一般病棟の個室に移ったが、人工呼吸器と点滴でかろうじて命をつなぎとめていた。

その夜、私は少しでも母のそばにしようと病室に泊まり込んだ。暗がりの中、プシュー、プシューと機械的に繰り返される呼吸音。否が応でも伝わってくる事実―。母が無言のまま1人、死線をさまよっている。ふと人の気配を感じ、何事かと思い、ソファベッドから頭をもたげ薄目を開けた。看護師さんが懐中電灯を手にささやくように言った。

「起こしてしまいましたか。寝てください。大丈夫。私たちが見ていますから。おやすみなさい」

床に落ちそうになっている毛布を掛け直してくれていたのである。

母ばかりではなく、私たち家族への気配りも忘れず、明るい笑顔で声を掛けてくれる看護師さん。

よく眠れましたか／無理をしないでくださいね／どんどん話しかけてください／きっと聞こえてますよ／顔色がよくなっていますね。

さりげない一言と笑顔に、どれほどくじけそうな心が励まされただろう。

生と死の境界線を越え向こう側に行きかけた母を、私たちの元に呼び戻した力。それは希望を捨てず、母のそばに寄り添い声を掛け続けた家族と、病院スタッフの最後までさじを投げない看護の「力」だったのである。

退院当日、看護師さんたちが見送る中、母が座る車いすを押しエレベーターに乗り込んだ。深々と頭を下げ顔を上げると、視線の先には、あふれる笑顔と揺れる手のひら。まばゆいばかりの光を背にして並んでいる天使たちが、私たち家族を送り出しているようだった。奇跡的な回復を遂げ、満面の笑みを浮かべ両手を振る母の姿が今も心に残る。

4年後、米寿を迎えた翌年、母は泉下の人となった。眠るように穏やかな最期だった。